

特別記事

会長就任にあたって

嶺重 慎 (京都大学)

1. はじめに

今年度から会長として任務にあたることになりました。よろしくお願いします。

さて編集長の作花さんより、会長としての抱負をまとめてほしいとの依頼を受けました。「ユニバーサルデザインや今後 20 年などで様々な提言をされているので、新会長として語りたいたくさんあると拝察します。」とのことです。

お言葉に甘えまして、少し書かせていただきます。

2. 地道な活動から

皆さんもご存じのように、本会は、さまざまのバックグラウンドをお持ちの方が参加し、それぞれの立場から多彩な活動を展開されている、極めてユニークな組織といえます。そこには、いろいろな価値観があり、いろいろな見方があるはずで、その広がりや深さに本会の大きな魅力があると思います。

したがって、私の会長としての任務は、その点(特に草の根的な活動)を大事にしつつ、会全体に関わる懸案事項に取り組んでいくことに尽きるでしょう。

20 年委員会での最終報告にもありましたが、本会は「天文教育普及活動をする人たちの集まり」だけでなく、「天文教育普及活動をする人たちをサポートする集まり」にもなるべきです。そのためにも、地元に着した活動の重要性はますます高まることでしょう。事実、これは、今年の年会のメインテーマでもありました。年会では、三鷹市や千葉市における成功事例を聞くことができました。大都市だから人が集まりやすい、地方ではそう

はいかないという声もありますが、丁寧に事例を伺ってみると、その成功の裏に地道な「ネットワーク作り」や「広報・発信活動」があることがわかります。この事例を全国展開するためのお手伝いができたらと思います。

3. より強固なネットワーク形成のため

現在、天文教育施設や学校を取り巻く状況は激しく変化しています。「業績」ということばが一人歩きし、地道に努力されている方の活動が正当に評価されていないように見えます。その中で、会員が本会の会合などにより活力を得ることが重要で、そのための環境作りが本会の果たすべき大きな役割であると認識しています。

となると、さまざまな声をひろいあげる仕組みが必要になります。声をひろいあげるという意味で、支部会の存在は極めて大きなものがあります。できる限り、支部会に足を運んで、全国の会員のみなさんと直接、話をしたいと思っています。

また、まだ素案の段階ですが、7月に解散した 20 年委員会の後継組織として、若手(20 年後も現役である世代)を中心とした委員会の設立を考えています。社会の動きに敏感な若い人の感性で、本会の今後の発展や変革のアイデアを自由に提言してもらい、そういう委員会です。いずれ、案をつめて運営委員会にお諮りします。

4. さらに広がる広がりをもとめて

以上は、主に本会内部についてのことがらでしたが、本会に閉じない懸案事項も多々あります。その一つは、日本天文協議会ほか、

天文教育関連の組織（JPA＝日本プラネタリウム協議会、JAPOS＝日本公開天文台協会、Astro-HS＝高校生天体観測ネットワーク、JAAA＝日本天文愛好者連絡会、日本天文学会）との連携です。また、海外交流、特にアジア諸国との交流も少しずつ広がっていくことでしょう。これらの動きに具体的にどう対応するのがいいのか、現時点では見えませんが、時間をかけて考えていきたい課題であります。

5. ユニバーサルデザインということ

さて私は、ユニバーサル・デザイン WG の代表も務めています。そこでひとつ強調しておきたいことは、「ユニバーサルデザイン天文教育」とは、「あらゆる人と宇宙を知る・学ぶ喜びや感動を共有する」という普遍的な概念であり、障害者など、特殊な立場の人のみを対象とした特別な活動を意味するのではないということです。宇宙に接する機会に、違いがあってはなりません。とはいうものの資金難から、あるいは限られた人材からできることに限りがあるという現実があります。が、そのことにとらわれるのではなく、まずは、一人一人との対話を大事にしていくことから始めていきたいと思えます。

「一人一人を大事にしていく」というと、それは（地道な）天文教育普及活動の基本であります。天文教育普及活動はその目的や内容において、本来、ユニバーサルデザインでなければならないとも言えます。その観点で、まずは年会や支部会、その他の活動にいろいろな人を誘い、対話を楽しんでいくことを、もっと日常化していきたいと願います。そのことから学ぶことも多いはずで

6. まとめにかえて

昨年度の年会の講演でも触れましたが、私は「教育」というとき、次の二つのことばを

忘れることができません。繰り返しになりませんが再掲します。著者は、それぞれ国際協力および障害児教育において著名な方です。

(1) 「教育だけが永遠である」 ([1])

私は「教育だけが永遠である」と考えている。海外協力においても、金や物の協力はいかに莫大なものであっても、その場かぎりの一時的なものである。ところが人から人へ伝わっていく教育的な協力は、いかに小さいものであっても時間をこえ、空間をこえて限りなく発展するものであることを私自ら体験してきたからである。

(2) 「教育によって生命が輝く」 ([2])

人や物とのかかわりのチャンスを増やし、子ども自身の活動を活性化させ、発達を促していくことによって、健康は維持（というよりも増進）され、生命が強められていくという関係がある。施設や学校の関係者が「教育によって生命が輝く」という言葉をよく口にしたが、それはこのような関係のことを言っているのである。

参考文献

- [1] 中田正一(1998)「国際協力の新しい風」岩波新書（赤 130）p.120.
- [2] 茂木俊彦(2007)「障害児教育を考える」岩波新書（新赤 1110）p.53-54.